

令和5年春季シラス(5~6月前半)漁況予報

令和5年5月1日

水産技術センター

今後の見通しのポイント

春シラス漁：前年並～前年を下回る

1. 海況の概況

潮岬沖の黒潮は、2017年の8月以降、離岸傾向が継続し、本年に入っても4月中旬まで離岸する状況が続いています（下表）。国立研究開発法人水産研究・教育機構の情報によると、今年4~7月における潮岬沖の黒潮は離岸傾向が継続すると予測されており、春季シラス漁期である5~6月前半は離岸して推移すると考えられます。

表 潮岬沖における黒潮の離岸距離 単位：海里(1海里=1,852m)

年\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2020年	115	121	149	159	235	263	183	115	243	40	88	158
2021年	88	109	105	106	119	83	101	131	144	155	166	185
2022年	176	156	150	166	174	154	218	158	165	139	145	146
2023年	171	190	188	105								

※本年4月は中旬まで、網がけは離岸傾向を示す

※表中の値は海上保安庁「海洋速報」のデータから算出

2. カタクチイワシ卵の出現量および漁況の概要

本年1~3月の日向灘~紀伊水道外域における調査では、カタクチイワシ産卵量（暫定値）は前年の103%、平年（2012~2021年の平均値）の41%と、前年並みで、平年を下回る水準となりました。また、徳島県、和歌山県の情報によると、紀伊水道外域および紀伊水道における2月、3月のカタクチイワシ卵は前年、平年を上回りましたが、低水準でした。大阪湾内では、4月上旬の水産技術センターの調査で、前年並みで過去5年平均を下回るものの、平年（1985年~2019年の平均値）を上回る数の卵が採集され、今期の産卵は近年同様、例年よりも早めに始まったものと推測されます。

紀伊水道周辺における本年春季漁は、和歌山県で漁が行われていますが、4月中旬までは低調に推移している模様です。

3. 漁況の予測

大阪湾で春季に漁獲の対象となるシラスは、漁期前半は外海域（日向灘~紀伊水道）で発生し補給されるイワシシラス（カタクチイワシ、ウルメイワシ、マイワシの3種）が主体となります。このため、大阪湾での春季シラス漁の好、不漁は外海域での発生量が多いか少ないか、さらにそれらがシラスとなって大阪湾まで補給されるかどうかにより大きく影響されます。また、漁期後半では大阪湾内で生まれたカタクチシラス（内海発生群）の加入状況が漁模様に大きく影響します。

前年（2022年）は、黒潮が潮岬沖で大きく離岸し、紀伊水道からのシラスの補給は期待できない状況で、漁獲は5月中旬まで低調に推移しました。しかし、5月下旬以降に大

阪湾内発生と推測される群の加入がみられ、低調だった前年を上回る漁獲が6月中旬まで続きました。なお、シラスの種組成は、5月上旬にはカタクチシラスが8割、ウルメシラスが2割近くを占め、マシラスの割合はわずかでした。6月にはカタクチシラスのみとなりました。

本年は、潮岬沖の黒潮は離岸傾向が継続するという予測、外海でのカタクチイワシの発生が近年同様、低水準と考えられることや、紀伊水道周辺域における漁模様から、大阪湾内へのカタクチシラスの来遊量は、前年並みの水準と推測されます。

一方、内海発生群については、例年、6月中～下旬から加入が本格的に始まりますが、前年は5月下旬から加入がみられました。本年における水温は、3月以降、前年同様、平年より高めで推移しており、気象庁の長期予報では5～7月の平均気温は高めの見込みとなっています。4月のカタクチイワシ卵稚仔調査結果から、近年同様、産卵は例年より早めに始まったものと推測され、前年と同様に5月下旬～6月上旬に内海発生群が加入する可能性があります。この群れの加入については現時点では不確実な状況です。

これらのことから、本年の春季シラス漁(5～6月前半)は、前年並～前年を下回る漁となるでしょう。

なお、今後の大阪湾内発生群の状況については、5月中旬に大阪湾におけるカタクチイワシの産卵情報を、また、夏季シラス漁、マイワシ、カタクチイワシ漁については例年どおり6月上旬に漁況予報を、それぞれ発表する予定ですので、参考にしてください。